TMA-230 の前期臨床第II相試験成績

國井 乙彦¹⁾・齋藤 厚²⁾・熊澤 淨一³⁾・荒田 次郎⁴⁾ 松田 静治⁵⁾・大石 正夫⁶⁾・馬場 駿吉⁷⁾

1)帝京大学第2内科*

2)琉球大学第1内科

3)九州大学泌尿器科

4)岡山大学皮膚科

8)江東病院産婦人科

6)新潟大学眼科

"名古屋市立大学耳鼻咽喉科

(平成7年2月8日受付・平成7年3月30日受理)

新しく開発された経口ペネム系抗生物質 TMA-230 を各科領域の細菌感染症を対象として,100 mg 1日3回投与を中心に,有効性・安全性を検討した。呼吸器感染症では,100 mg 1日2回から 200 mg 1日3回投与を行った(1日投与量 200~600 mg)。急性気管支炎では全例有効で,細菌性肺炎では 90%に近い有効率が得られたが,慢性気道感染症での有効率は 56.7%であった。また,細菌学的効果では主要起炎菌のうち Staphylococcus aureus や Streptococcus pneumoniae では 80%以上の菌消失率であったが,Haemophilus influenzae に対しては 9.1% (1/11) と低く,不十分な成績であった。尿路感染症および皮膚科,産婦人科,眼科,耳鼻咽喉科領域感染症では 100 mg 1日3回投与で満足できる臨床効果および細菌学的効果が得られた。自他覚的副作用発現率は 13.2%(28/212)で,特に下痢・軟便,悪心・嘔吐など消化器症状の発現頻度が 9.9%(21/212)と高かった。臨床検査値異常の発現頻度は 8.0%(17/212)で,GOT,GPT,Al-P上昇の肝機能異常が主なもので,すべて一過性の変動であった。

Key words: TMA-230, 体内動態, 臨床試験

経口用 β-ラクタム剤は、感染症治療剤として、1) 毒性が低いこと、2) 注射剤に比べて投与が簡単であるため通院による治療に使用することが可能であること、などの利点があり、広く使用されている。しかし、セフェム耐性の腸内細菌を含むグラム陽性菌および陰性菌の双方に強い活性を示す β-ラクタム剤が存在しないため臨床効果の面ではまだ十分とは言えない。

TMA-230 は武田薬品工業株式会社で開発された、アセトキシメチルエステル型経口ペネム系抗生物質である (Fig. 1)。本剤は、腸管壁のエステラーゼにより分解され、活性本体である AMA-3176 となり、動物腸管から良好に吸収さ

Acetoxymethyl (+)-(5R, 6S)-6-[(R)-1-hydroxyethyl]-7-oxo-3-(3-pyridyl)-4-thia-1-azabicyclo[3.2.0]hept-2-ene-2-carboxylate

Fig. 1. Chemical structure of TMA-230.

れ、またペネム系抗生物質に作用するヒトの代謝酵素デヒドロペプチターゼに安定である。AMA-3176 はセフェム耐性の腸内細菌を含む、グラム陽性菌および Pseudomonas aeruginosa を除くグラム陰性菌に対し抗菌力を発揮することが確認された¹⁾。

TMA-230 の各種毒性試験の結果では、特に問題となる所見は認められず、また、マウスでの実験的感染症に対して in vitro 活性を反映した優れた防御効果が認められた。

以上の成績を踏まえて健康成人男子志願者を対象とした臨床第 I 相試験が実施され、危惧すべき副作用が認められないこと、食後投与により薬効発現に十分な血中濃度が維持され、反復投与によっても蓄積性が認められないことが明らかになった²⁾

今回,我々は内科,泌尿器科,皮膚科,産婦人科,眼科,耳鼻咽喉科領域の細菌感染症を対象として,TMA-230の前期臨床第II相試験を実施し,有効性・安全性,至適用法・用量を予備的に検討したので,その成績を報告する。

I. 対象および試験方法

1. 対象

対象は1992年11月から1993年9月までの期間に

Department of Internal Medicine

Department of Respiratory Diseases

Table 1-1. Collaborating clinics

[Internal medicine]

Hokkaido University First Department of Medicine

Hokkaido University Second Department of Medicine

Hirosaki University Third Department of Internal Medicine

Institute of Development, Aging, and Cancer, Touhoku University Department of Respiratory Medicine

Seirei Mikatagahara Hospital Department of Respiratory Disease

Institute of Medical Science, University of Tokyo Department of Infectious Diseases

The Jikei University School of Medicine The Second Department of Internal Medicine

The Jikei University School of Medicine, Kashiwa Hospital The Department of General Internal Medicine

Kyorin University First Department of Internal Medicine

Institute of Medical Science, St. Marianna University

Teikyou University Department of Internal Medicine, Division 2

Kanagawa Prefecture Midwives and Nurses Training School Hospital

Kanagawa Prefectural Cardiovascular and Respiratory Disease Center

Nagoya City University First Department of Medicine

Kosai General Hospital Division of Respiratory Diseases

Nara Medical University Second Department of Internal Medicine

Tane General Hospital Department of Internal Medicine

Kawasaki Medical School, Department of Medicine Division of Respiratory Diseases

Kyushu University First Department of Internal Medicine

Kurume University Medical School First Department of Internal Medicine

Nagasaki University The Second Department of Internal Medicine

Imari Municipal Hospital Department of Internal Medicine

Nagasaki Municipal Hospital Adult Disease Center Department of Internal Medicine

Goto Central Hospital Department of Internal Medicine

Nagasaki Prefectural Adult Disease Center Tarami Hospital Department of Internal Medicine

Hokusho Central Hospital Department of Internal Medicine

Nagasaki University, Institute of Tropical Medicine Department of Internal Medicine

Oita Medical University Second Department of Internal Medicine
University of the Ryukyus First Department of Internal Medicine

[Urology]

Kyushu University Department of Urology

Hara Sanshin Hospital Department of Urology

Kyushu Koseinenkin Hospital Department of Urology

Kitakyushu City Wakamatsu Hospital Department of Urology

Kyushu Rosai Hospital Department of Urology

Moji Rosai Hospital Department of Urology

Spinal Injuries Center Service of Urology

Beppu National Hospital Department of Urology

Miyazaki Prefectural Miyazaki Hospital Department of Urology

Kobe University Department of Urology

Yodogawa Christian Hospital Department of Urology

Akashi Municipal Hospital Department of Urology

Nishiwaki Municipal Nishiwaki Hospital Department of Urology

City Kasai Hospital Department of Urology

Hyogo Prefectural Kaibara Hospital Department of Urology

Takasago Municipal Hospital Department of Urology

Hyogo Prefectural Awagi Hospital Department of Urology

Mita & Terasoma Urological Clinic

[Dermatology]

Okayama University Department of Dermatology

Okayama Saiseikai General Hospital Department of Dermatology

Okayama Red Cross Hospital Department of Dermatology

Okayama National Hospital Department of Dermatology

Kawasaki Medical School, Kawasaki Hospital Department of Dermatology

Okayama Industrial Hospital Department of Dermatology

Society Insurance Hiroshima Municipal Hospital Department of Dermatology

Takamatsu Red Cross Hospital Department of Dermatology

Table 1-2. Collaborating clinics

[Obstetrics and Gynecology]

Koto Hospital Department of Obstetrics and Gynecology

Juntendo University Department of Obstetrics and Gynecology

[Ophthalmology]

Niigata University Department of Ophthalmology

Suibarago Hospital Department of Ophthalmology

[Otorhinolaryngology]

Nagoya City University Medical School Department of Otorhinolaryngology

Nagoya City Higashi Hospital Department of Otorhinolaryngology
Kasugai Municipal Hospital Department of Otorhinolaryngology

Koseiren Atsumi Hospital Department of Otorhinolaryngology

Table 1 に示した施設を受診した、感染症状が明確で、 その程度が軽症ないし中等症の細菌感染症患者とした。 ただし、次の患者は対象から除外した。

- (1) 重篤または進行性の基礎疾患・合併症を有し、治 験薬の薬効評価が困難な症例
- (2) 重症感染症などで経口剤による治療が不適当と判断される症例
 - (3) 重篤な心, 肝または腎機能障害を有する症例
- (4) β-ラクタム系抗生物質にアレルギーの既往のある症例
- (5) 妊婦, 授乳婦および妊娠している可能性のある症例
- (6) 緑膿菌など本剤に非感受性の菌種による感染症で 効果が期待しがたい症例
- (7) 加齢により薬効評価が困難な、あるいは困難と予 測される症例
- (8) その他,治験担当医師が不適当と判断した症例 なお,産婦人科領域では,乳腺炎症例において(5)の授乳婦のうち授乳を中止している場合は対象から除外する こととした。

また、治験の開始にさきだち、あらかじめ患者または 家族に治験薬および治験内容について説明し、自由意志 による治験参加の同意を得た。

2. 投与量および投与方法

TMA-230 は50 mg(力価表示,以下略)錠または 100 mg 錠を用い,1日量 150~600 mg を1日2回または3回に分けて3~15日間食後経口投与した。

3. 症状・所見の観察および臨床検査

基礎疾患,合併症および既往歴を調査するとともに, 自他覚症状を原則として毎日観察し症例記録用紙に記録 した。

臨床検査として、呼吸器感染症では胸部 X 線を撮影するとともに、全科にわたり CRP、赤沈、血液(赤血球数、ヘモグロビン、ヘマトクリット、白血球数、血小板数など)、プロトロンビン時間、肝機能(GOT、GPT、Al-P、総ビリルビンなど)、腎機能(BUN、血清クレアチニン)および尿(蛋白、糖、沈渣)などの検

査を実施した。

また、喀痰、尿などの培養による菌検索を実施した。なお、呼吸器感染症、産婦人科領域感染症および耳鼻咽喉科領域感染症の一部の患者で、血中ならびに喀痰や組織への薬物移行の検討のため、検体を採取し Bioassay 法で測定した。

4. 効果判定および安全性評価

臨床効果は、臨床症状、各種検査成績および胸部 X 線所見または尿所見などの改善度、原因菌の消長などを もとに総合的に判断し、「著効」、「有効」、「やや有効」、 「無効」の4段階で評価した。なお、尿路感染症では UTI 薬効評価基準に準拠し、産婦人科領域では「著 効」、「有効」、「無効」の3段階で評価した。

副作用は発現したすべての随伴症状のうち本剤投与との因果関係が「明らかに関連あり」,「多分関連あり」, 「関連あるかもしれない」と判定された症状とした。

臨床検査値異常変動は、検査値異常のうち本剤投与との因果関係が「明らかに関連あり」、「多分関連あり」、「関連あるかもしれない」と判定された変動とした。

II. 試験成績

1. 症例の内訳 (Tables 2, 3)

各領域の細菌感染症219例について検討した。

有効性評価対象例数は呼吸器感染症 69 例 (急性気管 支炎 11 例,細菌性肺炎 28 例,慢性気道感染症 30 例), 尿路感染症 62 例 (UTI 基準に合致した例数,単純性尿 路感染症 16 例,複雑性尿路感染症 46 例),皮膚科領域 感染症 14 例,産婦人科領域感染症 10 例,眼科領域感染症 14 例,耳鼻咽喉科領域感染症 14 例の計 183 例であった。

尿路感染症を除く有効性評価からの非採用理由は、対象外疾患、副作用のため中止および来院せずなどで、尿路感染症では投与前菌陰性、投与後菌検査なし、尿検査なしなど UTI 基準非合致例であった。全科では計 36 例が有効性評価から除外された。

安全性評価対象例数は,全科 212 例中 205 例で,非採 用例数は7例,その理由は来院せず4 例などであった。 有用性評価対象例数は,尿路感染症を除く125 例中

Table 2. Case distribution

				rabic b, Ca					
			Total	Respiratory infection	Urinary tract infection	Dermatological infection	Obstetrical/ gynecological infection	Ophthalmological infection	Otorhinolaryngological infection
		evaluated	183	69	62	14	10	14	14
Total no. of	efficacy	excluded	36	9	20	3	1	2	1
patients		evaluated	212	74	81	15	11	16	15
219	safety —	excluded	7	4	1	2	0	0	0
	_usefulness	evaluated	125	70		14	10	16	15
	(137)	excluded	12	8		3	1	0	0

Table 3. No. of patients by diagnosis

	Diagnosis	No. of patients
	acute bronchitis	11
Respiratory	bacterial pneumonia	28
infection	chronic respiratory tract infection	30
	subtotal	69
	uncomplicated pyelonephritis	1
Urinary	uncomplicated cystitis	15
tract	complicated pyelonephritis	3
infection	complicated cystitis	43
	subtotal	62
Dermatologic	cal infection	14
Obstetrical/g	ynecological infection	10
Ophthalmolog	gical infection	14
Otorhinolary	ngological infection	14
	Total	183

113 例で, 非採用例数は 12 例であった。

2. 症例の背景

有効性評価対象症例 183 例の主要な背景因子を Table 4 に示した。

年齢は50~69 歳がもっとも多く,また,ほとんどが 軽症ないし中等症の感染症で,本剤投与前の化学療法が 有の症例が17例,無の症例が163例で,3例が不明で あった。

3. 投与量および投与期間

各感染症別の投与量と投与期間を Table 5 に示した。 呼吸器感染症では 100 mg×2 回, 100 mg×3 回, 200 mg×2 回および 200 mg×3 回投与を検討し, 投与期間 は 8~14 日間が多かった。

尿路感染症では主に 100 mg×3 回投与を検討し,一部の症例では 50 mg×3 回, 200 mg×3 回投与も行い,全例 7 日以内の投与であった。その他の領域では 100 mg×3 回投与を中心に検討し,投与期間は 6~14 日間が多かったが,産婦人科領域感染症では 3~5 日間が多かった。

4. 臨床効果

Table 4. Background of the patients

Item		No. of patients
	male	82
Sex	femal e	101
	18~39	41
Age	40~49	18
(yrs)	50~69	78
	70~84	46
	mild	41
Severity*	moderate	75
	severe	5
Underlying	absent	95
disease	present	88
Pretreatment	absent	163
with	present	17
antibiotics	unknown	3

^{*} except urinary tract infection (UTI)

疾患別臨床効果を Table 6 に示した。呼吸器感染症のうち急性気管支炎、細菌性肺炎では 100% (11/11)、89.3% (25/28) の有効率が得られたが、慢性気道感染症の有効率は 56.7% (17/30) であった。

尿路感染症では単純性は100% (16/16), 複雑性は80.4% (37/46), 合計で85.5% (53/62) の有効率であった。

その他の領域では眼科でやや有効1例,耳鼻咽喉科でやや有効,無効が各1例みられたほかは全例有効以上であった。

著効率は呼吸器感染症では10.1% (7/69), 尿路感染症では54.8% (34/62), その他の領域では51.9% (27/52) であった。

1日投与量別臨床効果を Table 7 に示した。呼吸器感染症では 100 mg×3 回が 83.3% (30/36), 200 mg×3 回が 65.2% (15/23) の有効率であった。尿路感染症では 100 mg×3 回で 87.0% (40/46) であった。その他の領域では 100 mg×3 回が 93.2% (41/44) であった。全体では 100 mg×3 回が 88.1% (111/126), 200 mg×3 回が 73.7% (28/38) であった。

Table 5. No. of patients by dosage and duration

Diameter	No. of		Daily o	losage (mg×	times)		
Diagnosis	patients	50×3 100×2		100×3	200×2	200×3	
Respiratory infection	69		3 (4.3)	36 (52.2)	7 (10.1)	23 (33.3)	
Urinary tract infection	62	9 (14.5)		46 (74.2)		7 (11.3)	
Dermatological infection	14		ł	13		1	
Obstetrical/gynecological infection	10			10			
Ophthalmological infection	14			8		6	
Otorhinolaryngological infection	14			13		1	
Total	183	9 (4.9)	3 (1.6)	126 (68.9)	7 (3.8)	38 (20.8)	
Division	No. of		D	uration (day	s)		
Diagnosis	patients	3~5	6~7	8~10	11~14	15~19	
Respiratory infection	69	6 (8.7)	8 (11.6)	29 (42.0)	15 (21.7)	11 (15.9)	
Urinary tract infection	62	33 (53.2)	29 (46.8)				
Dermatological infection	14	2	2	6	4		
Obstetrical/gynecological infection	10	7	2	1			
Ophthalmological infection	14	2	8	3		1	
Otorhinolaryngological infection	14	3	8	3			
Total	183	53 (29.0)	57 (31.1)	42 (23.0)	19 (10.4)	12 (6.6)	

(): %

Table 6. Clinical efficacy by diagnosis

	Discourie		Clinical	efficacy		Efficacy rate
	Diagnosis	excellent	good	fair	poor	(%)**
	acute bronchitis	1	10			11/ 11
Respiratory	bacterial pneumonia	5	20	1	2	25/ 28 (89.3)
infection	chronic respiratory tract infection	1	16	4	9	17/ 30 (56.7)
	subtotal	7	46	5	11	53/ 69 (76.8)
Uncomplicated urinary tract infection*		15	1			16/ 16
Complicated	urinary tract infection*	19	18		9	37/ 46 (80.4)
	Subtotal	34	19		9	53/ 62 (85.5)
Dermatologic	cal infection	9	5			14/ 14
Obstetrical/g	ynecological infection		10			10/ 10
Ophthalmolo	gical infection	7	6	1		13/ 14 (92.9)
Otorhinolary	ngological infection	11	1	1	1	12/ 14 (85.7)
	Total	68	87	7	21	155/183 (84.7)
Total except	Pseudomonas aeruginosa	67	82	5	15	149/169 (88.2)

[·] By the criteria proposed by the Japanese UTI Committee

5. 原因菌別臨床効果

原因菌別臨床効果を Table 8 に示した。単独菌感染では Staphylococcus aureus 検出例の有効率は 100%(7/7), Streptococcus pneumoniae 90.9%(10/11)で, グラム陽性菌では 94.3%(33/35)の有効率であった。グラム陰性菌では Escherichia coli 90.5%(19/21), Haemophilus influenzae 40.0%(4/10)で,全体では 74.6%(44/59),単独菌感染では 81.9%(77/94)であった。

複数菌感染での有効率は82.9%(34/41)で,全体では82.2%(111/135)であった。

6. 重症度別臨床効果

重症度別臨床効果を Table 9 に示した。軽症では 85.4% (35/41), 中等症では 84.0% (63/75) の有効率

であった。

7. 細菌学的効果

細菌学的効果を1日投与量別にして Table 10 に示した。グラム陽性菌では S. aureus, Staphylococcus epidermidis 100%, S. pneumoniae 88.3% (10/12), Enterococcus faecalis 88.2% (15/17) で、全体では91.1% (72/79) の菌消失率であった。

グラム陰性菌では E. coli 91.9% (34/37), H. influenzae 9.1% (1/11) で,全体では 70.8% (75/106) の 菌消失率で、Pseudomonas aeruginosa を除外した菌消失率は 79.3% (73/92) であった。分離菌全体での菌消失率は 79.5% (147/185) で, P. aeruginosa を除外した場合は 84.8% (145/171) であった。

^{**} excellent + good/evaluated cases (%)

Table 7. Clinical efficacy by daily dose

Diamosis			Daily dose	(mg×time)		Efficacy rate	
Diagnosis	50×3	100×2	100×3	200×2	200×3	(%)**	
acute bronchitis		1/1	8/ 8		2/ 2	11/ 11	
Respiratory bacterial pneumonia		1/1	13/ 14 (92.9)	3/3	8/10 (80.0)	25/ 28 (88.9)	
infection chronic respiratory tract infection		0/1	9/ 14 (64.3)	3/4	5/11 (45.5)	17/ 30 (56.7)	
subtotal		2/3	30/ 36 (83.3)	6/7 (85.7)	15/23 (65.2)	53/ 69 (76.8)	
Uncomplicated urinary tract infection*	8/8		8/ 8			16/ 16	
Complicated urinary tract infection*	0/1		32/ 38 (84.2)		5/ 7 (71.4)	37/ 46 (80.4)	
Subtotal	8/9		40/ 46 (87.0)		5/ 7 (71.4)	53/ 62 (85.5)	
Dermatological infection			13/ 13		1/ 1	14/ 14	
Obstetrical/gynecological infection			10/10			10/ 10	
Ophthalmological infection			7/ 8 (87.5)		6/6	13/ 14 (92.9)	
Otorhinolaryngological infection			11/ 13 (84.6)		1/ 1	12/ 14 (85.7)	
Total	8/9	2/3	111/126 (88.1)	6/7 (85.7)	28/38 (73.7)	155/183 (84.7)	
Total except Pseudomonas aeruginosa	8/9	2/3	107/115 (93.0)	6/7 (85.7)	26/35 (74.3)	149/169 (88.2)	

^{*} By the criteria proposed by the Japanese UTI Committee

Table 8. Clinical efficacy by causative bacteria

	Causati	ve bacteria	Excellent	Good	Fair	Poor	Efficacy rate (%)**	
		Staphylococcus aureus	5	2			7/ 7	
		MRSA*		1	_		1/ 1	
	Gram-	Staphylococcus epidermidis	2	1	1		3/ 4	
	positive	Coagulase (-) Staphylococcus	2	3	_		5/ 5	
	bacteria	Streptococcus pneumoniae	4	6	1		10/ 11 (90.9	
		Enterococcus faecalis		1				
		Other GPB	3	3			1/ 1 6/ 6 33/ 35 (94.3 19/ 21 (90.5 2/ 2 2/ 4 4/ 10 (40.0	
Monomicrobial		subtotal	16	17	2		33/ 35 (94.3	
infection		Escherichia coli	17	2		2	19/ 21 (90.5	
		Klebsiella pneumoniae	1	1			19/ 21 (90.5) 2/ 2	
	Gram-	Serratia marcescens	2			2	2/ 4	
	negative	Haemophilus influenzae		4	1	5	4/ 10 (40.0	
	bacteria	Pseudomonas aeruginosa		3	1	3	3/ 7 (42.9	
		Other GNB	8	6		1	14/ 15 (93.3	
		subtotal	28	16	2	13	44/ 59 (74.6	
		subtotal	44	33	4	13	77/ 94 (81.9	
	GPB+GF	'B	1	2		-	3/ 3	
Polymicrobial	GPB+GN	1B	10	18		5	28/ 33 (84.4	
infection	GNB+G1	NB	2	1	1	1	3/ 5	
		subtotal	13	21	1	6	34/ 41 (82.9	
	Т	otal	57	54	5	19	111/135 (82.5	
Total except Psea	idomonas a	eruginosa	57	51	4	16	108/128 (84.4	

[•] Methicillin-resistant S. aureus

8. 薬物移行

呼吸器感染症の5例で初回投与時に血漿および喀痰中 濃度を測定し,産婦人科領域感染症の5例および耳鼻咽 喉科領域感染症の5例で組織移行性を検討した(Tables 11~13)。

喀痰中濃度は1例(No.2)で投与後2時間に $0.46 \mu g/m$ l と比較的高い濃度が検出されたが、その他の症例ではほとんどが $0.06\sim0.07 \mu g/m$ l または測定下限未満

(<0.04 μg/ml) の低い濃度であった。

産婦人科領域では女性性器組織に投与後 $2\sim4$ 時間で $0.17\sim0.46~\mu g/g$ の濃度であった。

耳鼻咽喉科領域では 100 mg 投与後 1.25 時間で血漿中濃度は $0.17~\mu g/ml$,扁桃中濃度は検出限界以下であった (No.1)。 200 mg 投与では 1.50 時間後に血漿で $1.62\sim2.12~\mu g/ml$,扁桃で $0.44\sim0.64~\mu g/g$ (No.2,3), 2.00 時間後に血漿で $1.27\sim1.54~\mu g/ml$,扁桃で $0.20~\mu g/g$,

^{**} excellent+good/evaluated cases (%)

^{**} excellent+good/evaluated cases (%)

鼻茸で 0.44 μg/g の濃度であった。(No. 4,5)。

9. 副作用および臨床検査値異常変動

副作用は来院しなかったため服薬が確認できなかった

Table 9. Clinical efficacy by severity

Severity	Excellent	Good	Fair	Poor	Efficacy rate (%)*
Mild	2	33	2	4	35/ 41 (85.4)
Moderate	31	32	4	8	63/ 75 (84.0)
Severe	1	3	1		4/ 5
Total	34	68	7	12	102/121 (84.3)
Total except P. aeruginosa	33	65	5	10	98/113 (86.7)

Except UTI

追跡不能 4 例, 同意の撤回, 他抗菌薬併用, 対象外疾患各 1 例の計 7 例を除いた 212 例で評価した (Tables 14.15)。

自他覚的副作用は、212 例中 28 例にみられ、発現率は13.2%(28/212)で、下痢・軟便などの消化器症状の発現頻度が9.9%(21/212)と高かった。症状は、ほとんどが軽度であったが、下痢、頭痛の2 例、悪心、腹部膨満感、指の痛み・腫脹、搔痒感の各1 例の計8 例で、患者の希望もしくは治験担当医師の判断により投与が中止された。

臨床検査値異常変動は、17例にみられ、発現率は 8.0%(17/212)であった。主なものは好酸球増多のほか GOT・GPT 上昇、Al-P 上昇などの肝機能障害で投与中止例はなく、ほとんど一過性のものであった。

Table 10. Bacteriological effect by causative organism and daily dose

	0		D	aily dose (mg×ti	me)		Eradication
	Organism	50×3	100×2	100×3	200×2	200×3	(%)
Gram- positive bacteria	S. aureus MRSA S. epidermidis C.N.S. S. pneumoniae E. faecalis Other GPB	1/ 1		11/ 11 2/ 2 4/ 4 6/ 8 6/ 8 12/ 14 (85.7) 18/ 18	2/ 2	2/ 2 2/ 2 3/ 3 3/ 4	11/ 11 2/ 2 6/ 6 6/ 8 10/ 12 (83.3) 15/ 17 (88.2) 22/ 23 (95.7)
	subtotal	1/ 1	. 0	59/ 65 (90.8)	2/ 2	10/11 (90.9)	72/ 79 (91.1)
Gram- negative bacteria	E. coli K. pneumoniae S. marcescens H. influenzae P. aeruginosa Other GNB	7/ 8		23/ 24 (95.8) 4/ 4 3/ 3 0/ 3 1/ 11 21/ 24 (87.5)	0/ 1 2/ 2	4/5 1/2 1/7 1/3 7/8	34/ 37 (91.9) 4/ 4 4/ 6 1/ 11 (9.1) 2/ 14 (14.3) 30/ 34 (88.2)
	subtotal	7/ 9 (77.8)	0	52/ 69 (75.4)	2/ 3	14/25 (56.0)	75/106 (70.8)
	subtotal except P. aeruginosa	7/ 9 (77.8)	0	51/ 58 (87.9)	2/ 3	13/22 (59.1)	73/ 92 (79.3)
	Total	8/10 (80.0)	0	111/134 (82.8)	4/ 5 (80.0)	24/36 (66.7)	147/185 (79.5)
Tota	al except P. aeruginosa	8/10 (80.0)	0	110/123 (89.4)	4/ 5 (80.0)	23/33 (69.7)	145/171 (84.8)

Table 11. Plasma and sputum concentration (respiratory infection)

(AMA-3176 concentration, bioassay, $\mu g/ml$)

2	N-	Diagnosia	Sample		Adn	ninistr	ation t	ime (l	n) Î		Bacteriological	
Dose	No.	Diagnosis	Sample	before	1	2	3	4	6	8	effect	
		chronic bronchitis	plasma		2.35	3.22	3.13	3.12	0.31	0.11	H. influenzae	
1	chronic bronchitis	sputum	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	unchanged		
2	chronic bronchitis	plasma		6.38	4.74	2.64	1.56	0.48	0.12			
	Z	chronic bronchius	sputum	ND	0.18	0.46	0.04	ND	ND	ND	unknown	
100 mg		A	plasma	ND	1.82	2.17		2.82	1.23		•	
	3	chronic bronchitis	sputum	ND	ND				0.07		unknown	
		1 11-4-1-	plasma	ND	1.30	2.42		0.86			S. pneumoniae	
	4	bronchiectasis	sputum	ND	ND	0.06	0.07	0.07			eradicated	
200 mg 5	_	1	plasma	_	-	_		_			P. aeruginosa	
	5	bronchiectasis	sputum	-	ND	_	_	_	ND		decreased	

ND: Not detected ($<0.04 \mu g/ml$), -: impossible, Blank: Not tested

^{*} excellent+good/evaluated cases (%)

なお、副作用や臨床検査値異常変動の発現率に用量依存性はみられなかった。

III. 考 察

近年,グラム陽性菌および陰性菌の双方に強い抗菌力 を示し,かつ,セフェム耐性の腸内細菌にも有効な経口

Table 12. Plasma and tissue concentration (obstetrics & gynecology)

(Administration; 200 mg, AMA-3176 concentration, bioassay, μ g/ml)

	Case no.	1	2	3	4	5
	Time (h)			3.25	4.42	6.70
Diagna	peripheral vein	0.40	1.56	1.47	0.63	0.15
Plasma	uterine artery	0.39	1.55	1.48	0.54	0.11
	oviduct	ND	0.27	0.41	0.15	ND
	ovary	ND	0.28	0.41	0.24	0.10
Tissue	endometrium	ND	0.46	0.17	0.19	ND
Tissue	myometrium	ND	0.30	0.18	0.11	ND
	cervix uteri	ND	0.31	0.32	0.12	ND
	portio vaginalis	ND	0.45	0.46	0.16	ND

β-ラクタム剤としてペネム系抗生物質の研究・開発が 積極的に進められている。

そのうち fropenem は 1993 年 6 月, ritipenem acoxil は 1994 年 6 月に開催された第 41 回および第 42 回日本 化学療法学会総会の新薬シンポジウムにおいて報告され

Table 13. Plasma and tissue concentration (otorhinolaryngology)

(AMA-3176 concentration, bioassay, ug/ml and g)

_			Admin	istration ti	me (h)
Dose	No.	Sample	1.25	1.50	2.00
100	١.	plasma	0.17		
100 mg	1	tonsil	ND		
	2	plasma		1.62	
	2	tonsil		0.64	
	3	plasma		2.12	1.27 0.20
200	3	tonsil		0.44	
200 mg		plasma			1.27
	4	tonsil			0.20
	5	plasma			1.27 0.20
	"	nasal polyp			0.44

Table 14. Adverse reactions

Item	No. of cases	Daily dose (mg×times)					
		50×3	100×2	100×3	200×2	200×3	
Diarrhea	9 (4.3)	1	1	7 (4.9)			
Loose stool	5 (2.4)			3 (2.1)		2 (4.4)	
Abdominal pain · Stomachache	2 (1.0)			2 (1.4)			
Nausea	2					2	
Heart burn · Loss of appetite	2		2				
Abdominal distention	1 (0.5)					1 (2.2)	
Headache	3 (1.4)		1	2			
Night sweating	1			1 (0.7)			
Pain of finger · Swelling	1					1	
Tinnitus	1			1			
Skin rash	1			1			
Itching	1			1			
No. of patients (%)	28 (13.2)	1 (9.1)	3 (60.0)	17 (11.9)	0	6 (13.3	
No. of investigation	212	11	5	143	8	45	

Table 15. Abnormal laboratory findings

Item	No. of cases	Daily dose (mg×times)						
		50×3	100×2	100×3	200×2	200×3		
Eosinophil †	2 (1.0)		1	2 (1.4)		<u> </u>		
Basophil †	1 (0.5)			1 (0.7)				
Monocyte ↑	1			1				
Atypical lymphocyte †	1			1				
GOT ↑	5 (2.4)	1		4 (2.9)				
GPT↑	8 (3.8)	1		7 (4.9)				
AL-P↑	3 (1.5)			3 (2.1)				
γ-GTP↑	1			1				
T. bil †	1			1				
BUN↑	1			1				
No. of patients	17 (8.0)	1 (9.1)	1 (20.0)	15 (10.5)	0	0		
No. of investigation	212	11	5	143	8	45		

た3.4)。

今回我々は、各科領域の細菌感染症を対象としてエステル型経口ペネム剤 TMA-230 の前期臨床第 II 相試験を実施し、本剤の有効性、至適用法・用量および安全性を予備的に検討した。

その結果,本剤は尿路感染症,皮膚科領域感染症,産婦人科領域感染症,眼科領域感染症および耳鼻咽喉科領域感染症では本剤の100 mg 1日3回食後経口投与で従来の経口セフェム剤に匹敵する臨床効果と細菌学的効果を有することが示唆された。

呼吸器感染症については, 100 mg 1日3回投与また は200 mg 1日3回投与により急性気管支炎は100% (10/10), 細菌性肺炎では87.5% (21/24) と高い有効 率が得られたが、慢性気道感染症に対しては 100 mg 1 日3回投与で64.3% (9/14), 200 mg 1日3回投与で 45.5% (5/11) の有効率であった。また、細菌学的効果 では、H. influenzae の消失率が 9.1% (1/11) と低い ことが明らかになった。呼吸器感染症では 100 mg 1日 2~3回投与の検討を主に進めたが、100 mg 1日3回投 与の33例中 H. influenzae 検出例が3例あり、いずれ も菌が存続したため,試験の後半では主に同菌検出例に 対しては 200 mg 1日 2~3 回投与に増量して検討を行 った。しかし、1日量を 400 mg~600 mg に増量しても H. influenzae は8例中1例で消失したのみであった。 また、表には示していないが、1日2回投与例では、投 与後出現菌として H. influenzae が確認された例が 2 例 あった。

呼吸器感染症の 5 例で喀痰中濃度を測定した結果では,1 例(Table 11, 症例 No. 2)で H. influenzae に対する本剤の MIC $0.39~\mu g/ml$ を超える濃度 $(0.46~\mu g/ml)$ が得られたが,他の症例では $0.07~\mu g/ml$ または測定下限未満($<0.04~\mu g/ml$)の低い濃度であった。

本剤の脱エステル活性体である AMA-3176 は酸性で安定な化合物であるが、喀痰中の pH は $7.0\sim8.0$ と報告されており $^{5.61}$ 、このために AMA-3176 は喀痰移行後速やかに分解、不活化され低い濃度となり、H. influenzae に対して抗菌力を発揮するのに十分な濃度が維持されない可能性もあり、H. influenzae の存続した原因として本剤の喀痰中濃度が低いことが考えられた。

なお、本剤の MIC が \leq 0.025 μ g/ml とより小さい S. pneumoniae 検出例では $0.07~\mu$ g/ml と低い喀痰中濃度ではあったが、除菌された例があった (Table 11、症例 No. 4)。ちなみに fropenem と ritipenem acoxil OH. influenzae に対する細菌学的効果は 67.8% (40/59),80.6% (29/36) と報告されており $^{3.4}$)、本剤より高かったものの最近の経口セフェム剤 cefcamate pivoxil の細菌学的効果 98.6% (71/72) に比べると低い成績であった。

安全性については本剤の自他覚的副作用の発現率は 13.2% (28/212) であり、下痢・軟便などの消化器症状 の発現頻度が 9.9% (21/212) と高かった。

臨床検査値異常は8.0% (17/212) にみられ、GOT・GPT 上昇が主なもので、ほとんどが軽度かつ一過性のものであった。

今回の成績では検討例数の少ない用量もあったが、副 作用や臨床検査値異常の発現率に用量依存性はみられな かったものの、消化器症状の発現率が高かった。

以上に述べたように前期臨床第II相試験の成績から,本剤は100 mg 1日3回投与により尿路感染症など外科系感染症に対しては十分使用に耐え得る有効性を有することが明らかになった。しかし、呼吸器感染症に対しては今回の成績から200 mg 1日3回投与でも効果不十分な例があり、適応が限られる可能性があるため、さらに増量して検討するか、または喀痰移行性を高めるための何らかの工夫が必要であると考えられた。

文 献

- 1) 33 rd ICCAC
- 2) TMA-230 参考資料 (武田薬品工業株式会社作成) (未発表)
- 3) 新薬シンポジウム SY 5555, 第 41 回日本化学療法学 会総会。June 18, 1993, 東京
- 4) 新薬シンポジウム FC/TA-891, 第 42 回日本化学療 法学会総会。June 10, 1994, 福岡
- 5) 中村清一,山内富美子,三上正志,山中栄一,長岡滋:各種慢性呼吸器疾患患者における喀痰喀出困難度 の程度と喀痰の性状に関する比較。呼吸 10:1195~ 1199,1991
- 6) 長岡 滋: 改訂喀痰学 12. IV. 痰の pH。中外医薬 38: 423~425, 1985
- 7) 新薬シンポジウム S-1108, 第 40 回日本化学療法学会 総会。May 22, 1992, 名古屋

TMA-230 early phase II study

Otohiko Kunii¹⁾, Atsushi Saito²⁾, Joichi Kumazawa³⁾, Jiro Arata⁴⁾, Seiji Matsuda⁵⁾, Masao Ooishi⁶⁾ and Shunkichi Baba⁷⁾

- ¹⁾Department of Internal Medicine, Division 2, Teikyo University, School of Medicine, Tokyo, Japan
- 2)First Department of Internal Medicine, Faculty of Medicine, University of the Ryukyus
- ³⁾Department of Urology, Faculty of Medicine, Kyushu University
- 4)Department of Dermatology, Okayama University Medical School
- ⁵⁾Department of Obstetrics and Gynecology, Kohtoh Hospital
- ⁶⁾Department of Ophthalmology, School of Medicine, Niigata University
- ⁷⁾Department of Otorhinolaryngology, Nagoya City University Medical School

TMA-230, a new oral penem antibiotic, was administered for infections in various departments at a dose of 300 mg t.i.d. mainly, and the clinical efficacy and safety were assessed. In respiratory tract infections 600 mg t.i.d. from 200 mg b.i.d. was administered. Although the efficacy rate was 100% for acute bronchitis and nearly 90% for bacterial pneumonia, it was 56.7% for chronic respiratory tract infection. The bacteriological effect was above 80% in Staphylococcus aureus and Streptococcus pneumoniae, but it was 9.1% (1/11) in Haemophilus influenzae. In urinary tract infection, infections in the fields of dermatology, obstetrics and gynecology, ophthalmology and otorhinolaryngology, the clinical and bacteriological effects could be obtained at a dose of 300 mg t.i.d. The revelation rate of side effects was 13.2% (28/212), and these were mainly digestive symptoms of diarrhea, loose stool, nausea and vomiting, and headache. Abnormal changes in laboratory findings were observed in 8.0% (17/212), and were mainly liver dysfunction of elevations of GOT, GPT and AL-P. These abnormalities were all transient.